

自然に抱かれてワインを楽しむ 創造力を解放する八ヶ岳の暮らし

スタジオアンビエンテ

窪田浩之さん [57歳]

取材 / 吉田桂 撮影 / 土居麻紀子

都市と地方、それぞれのいいところ取り

「東京の事務所から、この八ヶ岳の事務所までは車で2時間くらい。気分の切り替えをするのに、ちょうどいい距離なんです。ずっと同じ場所にいるとマンネリ化してしまいます。1週間に2日ほど八ヶ岳で過ごして、場所を変えて気分を変えることで、1週間を長く使っているように思います。都市には都市の、地方には地方のいいところがあるし、いいところ取りしている感じですね(笑)」

そう語る窪田浩之さんは、東京都渋谷区と山梨県甲斐市、そして八ヶ岳を擁する山梨県北杜市の3箇所に事務所を構え、スケジュールや気分に合わせて行き来している。

自ら設計した2階建ての建物には事務所だけでなく、住まいと自然派ワインのショップを併設。崖地に建っているため、視界を遮るものはなく、特に2階のテラスからの眺めは格別だ。晴れた日は富士山をはじめ、甲斐駒ヶ岳、北岳など南アルプスの雄大な山々が一望できる。八ヶ岳滞在中は、その景色を眺めながらワイングラスを傾ける時間がとてもリラックスできるのだと窪田さんは言う。

「息子が店主を務めるワインショップで扱うのは、主にフ

ランスやイタリアから仕入れた自然派ワイン。ときには生産者の話を直接聞きながら、ものづくりの魂がこもったものだけを選んでいきます。実は、伝統的な製法でつくられたワインと、私が目指す建築は似ているところがあるんです。伝統的なものを守りながらモダンに生きる。建築も、ただ新しく建てるだけでなく、古いものを修復しながら活かすことも大切だと考えています」

持続可能な社会を目指した活動を

窪田さんは10年ほど前から、故郷である山梨県への移住希望者をサポートする活動を続けている。いざ移住したいと思っても、現地での生活がイメージできないと不安だろうと、地元の有志とともに土地探しから就職情報、資金面についてもアドバイスしている。首都圏から近く、自然環境も素晴らしいとあって、都市部から八ヶ岳への移住者は年々増加しているという。

「その活動のなかで、地方に移り住む人が今後どうやって生きていくのかという観点も踏まえ、町づくりにも参加しています。人口が減少していく地方では空き家も増えていて、それを壊すべきか、修復して活かすべきかを考えて、持続可能な社会(SDGs)へと導くのも建築家の役割だと思います」

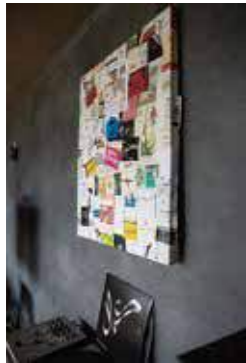
八ヶ岳に移住・2地域居住を希望する人々に、窪田さんは建物そのものだけでなく、未来の生き方までもデザインしている。



建物の2階からは雄大な山々の姿が見える。周囲の竹が程よく視界を遮り、自然と景色にフォーカスが絞られる。



2階のダイニングでは景色を眺めて食事を楽しむことも可能。



ダイニングの壁には、窪田さんが飲んだワインのエチケットを貼った、アートが飾られている。



右手手前が事務所と自宅へ、奥がワインセラーへのドア。左手はワインショップ[Soif]の入り口。



ゲストを迎えることの多い窪田さんは、シェフを招いて、もてなすこともある。



フランスやイタリアから厳選したワインが並ぶワインショップ。少量だがクラフトビールも。



窪田浩之
(山梨県甲斐市、山梨県北杜市、東京都渋谷区)
1962年山梨県生まれ/1985年法政大学工学部建築学科卒業後、数社の設計事務所やハウスメーカーを経て、1999年スタジオアンビエンテ窪田浩之設計室設立/2006年有限会社スタジオアンビエンテとして法人化